

第3回伊豆の国市市民憲章計画審議会

日時：令和6年2月16日 19時00分～20時45分

場所：あやめ会館2階会議室

《委員の発言》

委員名	発言の要旨
A委員	<ul style="list-style-type: none">・ワークショップでは、参加者は団体を背負ってということではなく、一個人として積極的に発言しており、よい雰囲気であったと思う。・2回目のワークショップを行うのであれば、構成を変えて、マイノリティや障がいを持つ方などからも意見を聴取できるとよい。・中学生の総合学習については、学習をした上で発表をしたというプロセスがよいと思う。今後のワークショップなりで、意見の深掘りをしていただければよい。・意見総数を見ると小中学生の属性が強い。子どもたちの目線では「歴史」や「自然」といった視点が多くなるが、それに対して、「産業」や「福祉」などの大人視点が抜けている。深掘りしないと出てこない意見もある。・私は、市民憲章の形式について、前文が「守るべき価値が何か」、本文が「そのために市民個人個人が何ができるのか」と考えている。そのために市民から出てきた意見を形式的にまとめていく作業を審議会で進めていくことになる。
B委員	<ul style="list-style-type: none">・ワークショップの参加者は地元出身者がほとんどであったが、そのような中で、市外から来た地域おこし協力隊の方は非常に熱く意見を語っていただいた。また、当日の参加者からは外国にルーツを持つ方からの意見を聞いて欲しいとの意見も挙がった。・意見聴取の結果を見ると、質問をする場面、場所、仕方によって返ってくる答えが異なりお散歩市では「温泉」、中学校では「多様性」など一歩先に進んだようなキーワードが出ていた。・「住みやすい」というキーワードが頻出しているが、その「住みやすい」にどのような想いが内包されているのか、深掘りできればよい。
C委員	<ul style="list-style-type: none">・ワークショップのメンバー構成がまちづくり団体に偏っている。また、女性の割合が極端に少なく、このような構成では、市民に意見を聞いたという正当性に欠ける。・意見聴取の結果を受けて、1つに収斂できないほどの意見があるということは、多様性の中で生きており、また、多様性の中で生きていくことを意識しなければならないというメッセージであると受け止めるべきではないか。・人口減少社会において、自治体が自立しての存続を目指す上では、市民憲章も長い時間、未来の人口減を見通したものであるべきと思う。・人口減少社会を意識する上で、新学習指導要領で共通した概念として位置づけられているのが「多様性」や「SDGs」。このような背景のもと、策定する市民憲章に「多様性」の概念が抜け落ちることがあってはならない。・合併から20年が経過した今策定する市民憲章が、全国に先駆け（人口減少社会における）日本の20年、30年後を示すものになればよいと思う。・近年、政府やメディアの間では「SDGs」とともに「DEI」という言葉がよく使われている。

	<p>「DEI」は「ダイバーシティ（多様性）」、「エクイティ（公平性）」、「インクルージョン（包括性）」の頭文字を取ったものであり、この世界観を実現する必要があるが、これまでの意見聴取の結果に、これらに通ずる意見が含まれていたのかについては、分析したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「国際性」という視点は、これまでのヒアリングの結果からは感じ取れない。 ・これまでに集まった意見を持って、市民憲章の素案作成に移行することは尚早でないか。後から出てくる意見もある中で先行して作るのではなく、全体の意見を見た上で、個別意見の全体の概念や理念、方向性を考え、先に進めるべき。 ・「多様性」については、全てを横断する概念であり、テーマの1つに設定しない方がいい。 ・最終的に市民の意見を総合して憲章文に反映させるのが審議会の役割であり、出てきた言葉そのものではなく「この言葉はこのようなことを表現していますよね」ということを、反映させていく作業を行えばよいのではないか。
D委員	<ul style="list-style-type: none"> ・意見聴取結果を受けて、意見の総数が小中学生に偏っていることは否めない。若い意見を吸い上げることも重要であるが、人口構成を考えると、高齢世代も含めて幅広く意見を吸い上げることが必要になる。 ・意見聴取に当たっては、最終的にはアナログ戦術になる。子どもたちはウェブ上で回答しているが、手法的にはアナログ戦術である。ぜひ、幅広い世代へ向けた仕掛けを行っていただきたい。
E委員	<ul style="list-style-type: none"> ・LGBTQやマイノリティに属する方々からも意見を吸い上げることができればよいと思うがこちらからアクセスできるのか、また、そのような方々が意見することを希望するのかといった課題がある。 ・地元で中心となり活動している方々の意見も必要ではあるが、他方で、意見を言いたいと同調して言うことができない、いわば潜在的な意見を吸い上げることも重要である。 ・共起ネットワーク図については、ワークショップの質問にあった「こんなまちはイヤだ」で出た意見と比較すると面白い。 ・素案作成に当たっては、まだふわっとしている部分もあり、現時点の議論をもって、審議会として市民の意見を絞り込むことは難しい。
F委員	<ul style="list-style-type: none"> ・生まれも育ちも伊豆の国市という方だけでなく、市外から来た方だからこそ気がつく伊豆の国市の魅力もあると思う。移住者など、幅広い層からも意見聴取ができればよい。 ・小学校6年生の主張作文を拝見したが、「伊豆の国市はこんなによいところがある」、「地域の人たちが大好きだ」という作文があり、子どもたちも伊豆の国市の魅力に目が向いていることを実感した。 ・小学生や中学生など異なる世代の中でも、共起ネットワーク図で可視化することで、似通ったキーワードが出てきているのかなと感じた。
G委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の意見を拝見して、学校や地区によって意見の差があることを実感した。 ・同じ伊豆の国市に対して違う思いを持っている子どもたちが、伊豆の国市がどのようなまちになったらよいと考えているのか、意見を吸い上げることができればよいと思う。

H委員	<ul style="list-style-type: none">・意見募集については、最終的に何を吸い上げたいのかという部分が明確にならないと延々とブレストを続けているようなもの。・共起ネットワーク図を出してもらうことによって、言葉を決める上では、分かりやすくなるのではないかと思う。
-----	---